第３回講義（文化）　　2020 年 9 月 26 日

日本美術の恩人たち
～「ボストン・オリエンタリスト」写真の謎～

杏林大学医学部　名誉教授

伊藤泰雄

１.はじめに

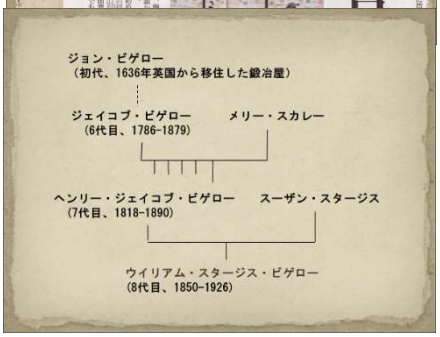
この度は講演の機会を与えていただきありがとうございます。私は外科医ですが、今日は病気の話をするのではなく、明治時代に日本の文化財保護に貢献した４人の人物についてお話ししようとしております。その４人はいずれもボストンにゆかりがあるため、「ボストン・オリエンタリスト」と呼ばれております。右の写真は 2012 年に開催されたボストン美術館「日本美術の至宝」展のカタログにも掲載されておりますが、写真のキャプションには「左よりエドワード・モース、岡倉天心、アーネスト・フェノロサ、ウイリアム・スタージス・ビゲローで 1882 年の撮影」となっています。しかし日本の美術関係者はこの日本人は岡倉の顔ではないと疑問を呈しておりました。

講演内容は３部で構成されております。先ずは、私がこれらの事を調べ始めるきっかけとなった第１部「ボストン美術館へ大量の日本美術品を寄贈した外科医ウイリアム・Ｓ・ビゲローの数奇な人生」からお話し致します。第２部でボストン・オリエンタリスト写真の日本人は岡倉かどうかについて触れ、最後に、顔認証に関連してもう１つ発見がありましたので第３部「横浜にあった高島学校の集合写真に写っていたのは岡倉天心少年か？」について、お話いたします。

２．第１部「ボストン美術館へ大量の日本美術品を寄贈した外科医ウイリアム・Ｓ・ビゲローの数奇な人生」

私は 1974 年から２年間、ボストンの Massachusetts General Hospital、略して MGH という病院に留学しておりました。MGH はハーバード大学の主要な教育病院で、開設は 1811 年です。右図は現在の病院正面です。この病院は世界ではじめてエーテルを用いた全身麻酔で無痛手術が公開で行われた病院として有名です。

それから約 30 年経った 2006 年のある日、私はボストン美術館所蔵肉筆浮世絵展に関する新聞記事を目にしました（右図）。そこには「今から約 100 年前、３万点に上る浮世絵が太平洋を渡った。買ったのは米国ボストンのウイリアム・ビゲローという裕福な外科医。大の日本好きだったビゲロー氏の私生活は謎めいていて、分かっているのは当時のセオドア・ルーズベルト大統領の親友だったことくらい。」と書かれていました。その時、私は MGH にビゲローという名のついた講堂があったのを思い出しました。MGH に名を残したビゲローと日本で美術品を蒐集したビゲローは同じ人物なのかについて興味を持ち、調べ始めました。



インターネットでビゲロー家のファミリー・サイトをたどってみる（右図）と新聞に載っていたウイリアム・ビゲローとはウイリアム・スタージス・ビゲローのことで、父親がヘンリー・ジェイコブ・ビゲロー、祖父がジェイコブ・ビゲローで、３代にわたってMGHに勤務していたことが分かりました。しかしウイリアム・スタージス・ビゲローはMGHに2年間しか勤務しておらず、MGHに名を残したのは祖父か父親と考えられました。

先ず祖父、ジェイコブ・ビゲローの略歴ですが（右図）、牧師の家に生まれていますので決して裕福であったとは思えません。彼はハーバード大学を卒業後、アメリカ最古の医学校であるペンシルバニア大学医学校に進み、卒業後、ボストンに戻りMGHの内科医師になります。彼のその後の経歴は、ハーバードの植物学講師、薬物学教授、そして物理学教授と多彩です。

彼が植物に詳しかったのは当時の薬が薬草だったからです。彼は「アメリカの薬用植物」という学術書を3冊出版しています。この本には60枚の美しい彩色画が掲載されていますが、3枚を除いて彼自身がスケッチしたものといわれています（右図）。カラープリントの図版としてはアメリカ初で、印刷方法はアクアチントという銅版画の一種ですが、印刷機は彼自身が考案したということです。オランダ商館の医師フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトが長崎に滞在して日本の薬草を収集、栽培したのはこれより5年後です。

ジェイコブは教会の設計を行うなど技術にも造詣が深かったため、ハーバード大学の物理学教授も兼任していました。彼は10年間の講義録をまとめて、「エレメント・オブ・テクノロジー」という500頁を越える本を出版しています。彼は多岐にわたる内容のテーマについて述べるために、本のタイトルにテクノロジーという言葉を用いました。テクノロジーの語源は「技・学」ですが、彼はテクノロジーという言葉を「実用を目的とした科学知識の技術応用」と定義しました。彼の定義したテクノロジーという用語は現代でもほぼ同じ意味で使われています。

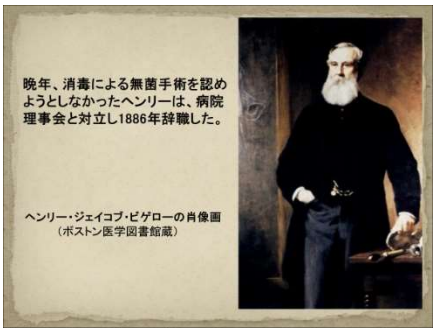
当時、インドの風土病だったコレラがパンデミックとなりニューヨークでも流行し始めました。ジェイコブは、コレラがボストンに飛び火しないよう、マサチューセッツ州から対策を講じるよう求められました。当時、微生物はまだ発見されておらず、伝染病の原因は分かっていませんでしたが、彼は人が集まる教会に死者を埋葬することで病気が蔓延することを恐れ、公園墓地を造ることを提案しました。そうしてできたのがボストン郊外の広大なマウント・オーバン墓地です（右図）。自然の地形を活かしたマウント・オーバン墓地の設計コンセプトは、その後全米の公園墓地やニューヨークのセントラルパークなど公園の設計へと受け継がれました。93歳で死去したジェイコブ・ビゲローの墓もここにあります。

次に父親ヘンリー・ジェイコブ・ビゲローの略歴です。ハーバード医学校を卒業後ロンドンに留学し、1846年に帰国後ＭＧＨの外科医になっています。この年の10月、MGHで世界初のエーテル麻酔による公開手術があり、彼はこれに立ち会っています。そしてわずか1か月後には「吸入麻酔による外科手術中の無痛」という論文を発表しています。この論文は、New English Journal of Medicineという一流医学誌の発刊200周年記念事業で、「医学に最も影響を与えた論文」に選ばれております。翌年、彼は東洋貿易で富豪となったスタージス家の娘スーザンと結婚し、ボストン・ブラーミンと呼ばれるボストンの上流社会に仲間入りします。さらにハーバード医学校の外科教授となり、名声を

博しますが、結婚からわずか6年で奥さんに先立たれています。ちなみに佐倉に順天堂が開設されたのが1843年ですので、そのころの話です。

右図はエーテル麻酔による公開手術の模様を描いた絵です。麻酔をかけているのが歯科医モートンで、外科医ウォーレンが患者の頸部から腫瘍を摘出しています。それまでの手術では、患者は痛みで悲鳴をあげていましたが、この時は眠った状態で手術が行われました。ヘンリーはモートンとウォーレンの間から顔を覗かせています。この時ヘンリーは28歳の若さですが、ヘンリーの立ち位置からも彼がこの公開手術で重要な役割を担っていたことが示されています。

ヘンリーは整形外科や泌尿器科領域でも名を残しておりますが、美術に関することに触れておきたいと思います。ヘンリーは留学中に医学以外に美術の修復技術を学んでおりました。そんなこともあって、アメリカ独立100周年にあたる1876年、ボストン市民有志によってボストン美術館が建設されるとヘンリーは美術館の理事に任命されました。彼は在任中、美術品の管理や保存に貢献しています。

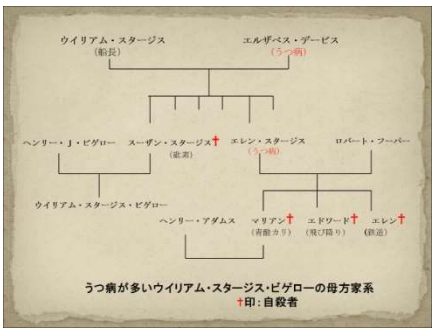


彼は大柄で堂々とした態度や話し方には威厳があり、外科の巨匠といった感じでした（右図）。手術も上手で、講義や手術には大勢の学生が集まるほど人気があったといいます。しかしヨーロッパでは、手術野や手術器具を消毒してから手術する無菌手術（リスター法）が広まりを見せており、MGHでも若い外科医がいち早く消毒法を取り入れようとしましたが、ヘンリーはこれに反対したため、次第に孤立し自ら辞表を提出してMGHを辞めています。

しかしMGHは彼のそれまでの功績を称えて、当時彼が手術を供覧していた階段教室の入口にヘンリー・J・ビゲローの名を刻んだ真鍮製のプレートを架け、室内にはブロンズの胸像を設置しました。従って、私の記憶にあったMGHの講堂に名を残したビゲローとは、父親ヘンリーだったことになります。

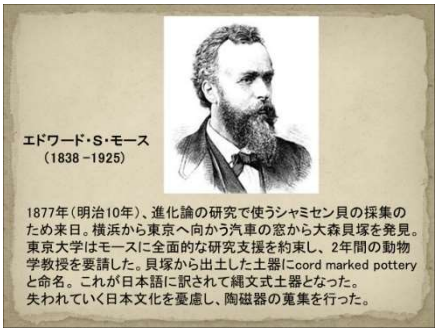
次に、ウイリアム・スタージス・ビゲローの略歴です（右図）。以後彼のことをスタージス、あるいはビゲローと呼ばせていただきます。彼は3歳の時、母親と死別しています。そんなこともあってか、彼の性格は内気で感受性が強い子だったようです。彼はハーバード医学校卒業後、ヨーロッパに留学しますが、最後の2年間はパスツール研究室で細菌学を学びました。当時のパリはジャポニスムが流行しており、スタージスもパリで日本刀や根付けなどを蒐集しています。帰国後、彼はボストンに細菌学研究所を立ち上げますが頑固な父親に反対され、説得されてMGHの外科医になってしまいます。しかしわずか2年後には精神的に破綻し、パリに逃避するなど気ままな生活を送っておりました。そんなときに日本から帰国したエドワード・モースが1881年冬に、ボストンで行った日本に関する12回の連続講演を聞いて、スタージスは非常に感銘を受け、モースを説得して約半年間の日本旅行を計画します。

母親スーザンの死因は自殺でした。スーザンはうつ病で、スタージスが３歳の時に第２子を身籠ったまま砒素を飲んで自殺してしまいます。母方の系図（右図）をたどりますと、スーザンの母親にうつ病があり、その気質はスーザンと姉のエレンと彼女の子ども達３人に受け継がれました。エレンの子供達（スタージスのいとこ達）は、次々と自殺しています。作家ヘンリー・アダムスと結婚していた次女マリアンは青酸カリを服毒して自殺、その２年後に姉エレン（母親と同名）は鉄道に身を投げて自殺しています。またマリアンの兄エドワードは自宅の３階から飛び降り、怪我がもとで死亡しています。



ここで一旦話を、明治初期の日本の状況に戻します。1868 年（明治元年）、政府は、神仏混淆であった寺社に対して「神仏分離令」を布告しました。この布告はこれまで優位にあった仏教に反発する神職や住民によって、寺の建物、仏像、仏画などの打ち壊しに発展しました。これが「廃仏毀釈」で、破壊は瞬く間に全国に波及しました。奈良の興福寺では僧侶のほとんどが神職に移り廃寺にしたため、壊された伽藍から集められた金剛力士像、阿修羅像、無著・世親（むちゃく・せしん）立像などが１か所に集められ、無残な姿をさらしています（右図）。これらは現在いずれも国宝となっています。

そんな時にモースは進化論の研究で使うシャミセン貝の採集のため３か月の滞在予定で日本にやってきました。モースは横浜から東京に向かう電車の窓から、線路脇の切割に貝殻の堆積があるのを見て、即座に貝塚であると見抜きました。これが大森貝塚の発見です。当時、東京大学は総合大学として発足してからまだ間もなく、動物学の教授を探していました。文部省はモースの学識と人柄を見込んで、彼に２年間の動物学教授を要請しました。モースはこれを受け入れ、大学はモースのために江の島に臨海実験所を設置、大森貝塚発掘を全面的支援しました。大森貝塚から出土した土器を、モースは調査報告書に英語で「cord marked pottery（なわ状の文様がついていた陶器）」と記しました。これが日本語に翻訳され「縄文式土器」と呼ばれるようになったのです。また彼は近代化政策によって日本の伝統的な文化が失われていくのを憂い、陶磁器の蒐集を行うようになりました（右図）。



モースは日本で初めてダーウィンの進化論を講義しました。また福沢らが社会の啓蒙を目的として始めた講談会でも講演しています。モースは進化論などを８回講演していますが、「人間は猿から進化した」という話が世間の話題になりました。当時、お雇い外国人には宣教師が多くモースは彼らから非難されましたが、日本人は進化論をすんなりと受け入れました。

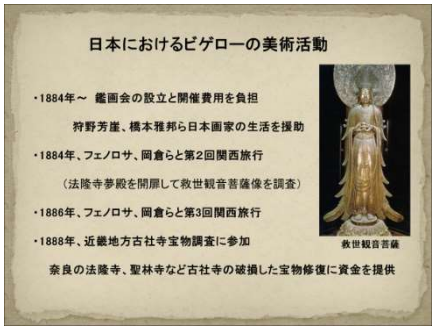
東京大学教授になったモースに、大学は政治、経済、哲学の教授を推薦依頼しました。そしてモースが推薦したのがアーネスト・フェノロサ（右図）でした。彼はハーバード大学で哲学を専攻し、卒業後、ボストンの美術学校で油絵を学んでいました。当時 25 歳だった彼はモースの推薦を喜んで受け入れ、新婚間もない妻リジーと共に来日しました。講義の傍ら、彼は日本の伝統的な美術に深い関心を寄せ、美術品を蒐集する一方、狩野派に入門して鑑識眼を養い、日本美術の鑑識で第一人者になり、狩野永探の画号を与えられました

。彼は日本で生まれた長男に「カノー」という名を付けています。

フェノロサの教え子に岡倉覚三がいました（右図）。岡倉覚三（後の天心）は英語が堪能だったためフェノロサの講義、講演、調査旅行などで通訳を務めました。東京大学を卒業すると岡倉は文部省に入り、フェノロサの影響で日本の文化財保護に目覚めます。

モースは 1879 年 9 月、任期を終えて帰国しています。モースは帰国後、ボストンの北方、セイラム市のピーボディー博物館館長に就任し、1881 年冬にボストンで日本に関する連続講演を行います。そしてモースはウイリアム・スタージス・ビゲローの熱意に動かされ、1882 年に再び日本にやってまいります。今回は研究目的ではなく、陶器や民具の蒐集が目的でした。今回の訪日は東京大学とは無関係でしたが、彼の来日を歓迎し、大学構内にあった天象台（現在の気象台と天文台が一緒になった建物）の官舎を宿舎として提供してくれました。そして 7 月～8 月にかけて、モース、フェノロサ、ビゲローは関西、中国地方を旅行し、翌 1883 年 2 月にモースは帰国します。

短期間の予定で来日したビゲローでしたが、この頃にはすっかり日本の食事や生活習慣にも慣れ、ビゲローは日本に残ることにしました。彼は駿河台鈴木町 20 番地に家を借りました。神田川を挟んで対岸には順天堂大学があります。



日本におけるビゲローの美術活動ですが（右図）、ビゲローはフェノロサらが立ち上げた美術品の鑑定を行う鑑画会の諸費用を負担し、大名の後ろ盾を失って生活が困窮していた狩野芳崖、橋本雅芳など日本画家の生活費を援助しています。フェノロサと岡倉はほぼ 2 年毎に文部省の仕事で奈良、京都に古社寺調査や文化財調査に出かけますが、ビゲローも同行しています。1884 年の調査旅行では 200 年以上閉ざされたままの法隆寺夢殿の扉を開けさせ、聖徳太子の姿と伝えられていた秘仏、救世観世音菩薩（ぐぜかんぜおんぼさつ）の調査を行っています。この時の情景は和辻哲郎の「古寺巡礼」に詳しく書かれています。またビゲローは、法隆寺や聖林寺（しょうりんじ）など寺社で壊れた文化財があるとお金を寄進して修理させています。

ビゲローが気ままな生活を送ることができたのは、母親からの莫大な遺産を相続したからです。彼の財力がどの程度であったかというと、文部省官吏として天心と共に東京美術学校設立に尽力した今泉雄作の回想談では、ビゲローは『その頃は 1 日で利子だけでも 400 円ずつ入るという金満家で、金の使い道がなくて困る』などと言うてブラブラ遊んでいた。」とあります。因みにフェノロサの月給は 300 円でした。また岡倉天心の愛弟子中川忠順（ただより）の回想では、「氏（ビゲロー）が病気で寝ている時にも道具屋がベッドの下へ沢山の掛け軸を押し込んで行くのを黙して見ていて、後から勘定を取りに来ても総ての代金を払った。」とあります。買い方も鷹揚で、浮世絵などはまとめ買いをした結果、後に整理してみると同じものが何枚もあったようです。

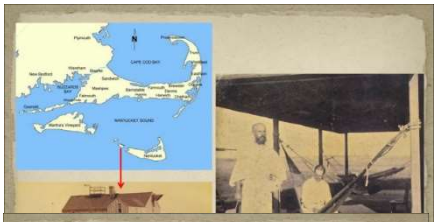
ビゲローは始め刀や刀の鍔を集めていましたが、フェノロサからの勧めもあって次第に蒐集の範囲を広げていきます。特に彼は浮世絵を積極的に買いはじめます。木版浮世絵は海外にも出回っていましたが、肉筆浮世絵はまだ輸出されずに日本にありました。彼が蒐集した浮世絵は木版が 3 万点を越え、肉筆は 700 点以上あり、非常に価値が高いものです（右図）。

来日時のビゲローは少年期に母を失った喪失感をずっと引きずっていて、精神状態は不安定だったと思われます。フェノロサも来日直前に父が海に投身自殺しています。そんな2人は、哲学と共通点が多い仏教に次第に傾倒していきます。2人は岡倉の紹介で大津市にある天台宗の三井寺別院、法明院住職桜井敬徳阿闍利から教えを受け、二人は受戒し（仏教徒になる誓いの儀式）スタージスには月心（げっしん）の法名が与えられました。右の写真は僧衣姿のビゲローです。

岡倉とフェノロサはかねてより美術学校開設に向け奔走していましたが、ビゲローは1889年2月、ついに上野に東京美術学校が開校し、岡倉は翌年には校長となります。フェノロサも東京大学から移籍して、美学、美術史の教員になりました。1889年（明治22年）12月中旬、父親が自ら操縦する馬車の事故で重傷を負ったため帰国しました。翌年父が死去すると、彼は父親から邸宅と別荘を相続し、ボストン美術館の理事職を引き継ぎます。ボストンの邸宅には、友人の政治家や知識人が集まり、彼らの活動拠点になりました。

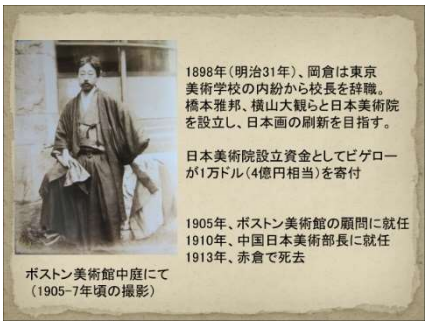
右図はビゲロー宅をしばしば訪れたルーズベルトです。ルーズベルトはニューヨーク州知事から副大統領に上り詰め、1901年、マッキンリー大統領が就任6か月後に暗殺されると42歳の若さで大統領に就任しました。大統領選挙でスタージスは資金援助を行いルーズベルトが再選されると彼の発言は大きな影響力を持つようになります。

またビゲローは父親からボストンの南、ケープ岬の沖合にあるタッカーナック島の別荘も相続しました（右図）。とても簡素な作りの別荘でしたが、スタージスは友人たちを招いて夏を過ごしました。現在もこの島は海岸を含めて数家族が所有する私有地のため、住人の招待がなければこの島に上陸することはできません。



フェノロサは1890年に任期満了で帰国し、スタージスの斡旋でボストン美術館の初代日本美術部長に就任しました。しかしフェノロサは妻と離婚し、助手のメアリーとニューヨークへ逃避して結婚するというスキャンダルを起こして、美術部長を解任されてしまいます（右図）。

岡倉はというと、1898年東京美術学校の洋画派との内紛から校長を辞職し、橋本雅邦、横山大観らと日本美術院を設立して、日本画の刷新を目指しました。この時、ビゲローは日本美術院の設立資金として1万ドル（現在の換算で約4億円）を寄付しています。一方、フェノロサが日本の美術品目録を完成しないまま辞めてしまったため、1905年、ビゲローは岡倉にボストン美術館の顧問を要請しました。岡倉はこれを受けてボストンに渡ります。右の写真はその頃ボストン美術館の中庭で撮影された岡倉です。岡倉は2010年中国・日本美術部長となり、死去（1913年）するまでボストン美術館に在職しますが、この間、日本美術院の運営とかけ持ちだったためボストンと日本との間を頻繁に往復する生活でした。



次に、ビゲローの政治手腕について触れたいと思います。1904 年、日露戦争が勃発すると、政府は司法大臣金子堅太郎を内密に渡米させ、講和条約締結に向けての裏工作を行わせました。金子は岩倉使節団に同行した留学生の一人で、ボストンの小学校に入学し、最終的にはハーバード大学ロー・スクールを卒業していますので、ビゲローとは同窓の仲です。そこでスタージスは親友であるルーズベルト大統領に金子を紹介して、紛争の調停を依頼しています。金子堅太郎と日本側全権大使、小村寿太郎はともにハーバード大学ロー・スクールの卒業生で二人が表裏一体となって講和条約締結に導きます（右図）。ルーズベルト大統領には講和条約締結の功績でノーベル平和賞が授与されています。

1909 年、日本政府はビゲローに、民間人に与えられる最高の勲章である勲 3 等旭日勲章を授与します。叙勲理由は、日本の美術品の保護に尽力し、日本の美術を世界へ紹介した功績によるものでした。しかし推薦文を書いているのが外務大臣小村寿太郎であったことから、政治的な功績も含まれていたと思われます。晩年の 3 年間は寝たきりで、1926 年 8 月、スタージスはエーテル麻酔下で前立腺手術を受けましたが、脳出血の合併症が起き死亡しました（享年 76 歳）。

彼の葬儀はボストンのトリニティー教会で行われ、祖父ジェーコブが造ったマウント・オーバン墓地に埋葬されました。

3 年前、私は墓地を訪れましたが、彼の墓はビゲロー家の墓所にありませんでした。管理事務所で聞くと別の場所を教えてくれましたが、そこは母方スタージス家の墓所で、イニシャル W.S.B. と生年、没年のみの簡素な墓石でした（右図）。そして隣にはやはりイニシャル S.S.B. と没年（1853 年）のみの母親スーザン・スタージス・ビゲローの墓がありました。

遺言によって遺骨の半分は、1928 年法明院に埋葬され、盛大な法要が営まれております。隣はフェノロサの墓です（右図）。

現在のボストン美術館です。3 年前に行ったときにはちょうどビゲロー・コレクションの浮世絵、国貞、国広展が開催されていました。美術館の裏手には岡倉天心を記念する天心園という日本庭園があります。

３. 第 2 部「ボストン・オリエンタリスト写真の日本人は岡倉ではない？～顔認証を用いて人物を特定～」

次に本日のメインテーマである「ボストン・オリエンタリスト写真の日本人は岡倉ではない？～顔認証を用いて人物を特定～」の話に移ります。

第 1 部でお話しした内容を、私は 4 年前、日本病院会雑誌に投稿しました。そして投稿前に、東京芸術大学資料室の吉田千鶴子先生に原稿をみて頂きました。すると吉田先生は、1882 年の撮影とされるボストン・オリエンタリストの写真をご覧になって「この日本人は岡倉ではありません。他の通訳でしょう」と仰いました。そこで私は日本人を「通訳？」と書き換えたのであります（右図）。

確かに、よく知られている岡倉の 18 歳の顔と 24 歳の顔の間に、問題の日本人の顔写真を拡大して当てはめてみると違和感があります（右図）。先ず髭が生えているのが変です。それではこの日本人はいったい誰なのかが疑問として残りました。そこで私はこの写真の原版がどこにあるのかを探し始めました。

この 4 人の写真は今まで本、論文、美術館のカタログなどに使用されていますが、「ボストン・オリエンタリスト」と名付けたのはフランクロイド・ライトの建築を研究しているオレゴン大学 Kevin Nute 教授です。そこで彼にメールで写真のオリジナルがどこにあるか尋ねました。「昔のことなので資料がなくて分からない」とのことでしたが、フェノロサの研究者の埼玉大学名誉教授の山口静一氏と岡倉天心のひ孫の岡倉登志氏を紹介してくれました。早速、お二人に問い合わせたところお二人とも「この日本人は岡倉天心ではない」としたうえで、写真の原版がどこにあるかはわからないと仰いました。

ところが、ボストン在住の知人がこの記事の切り抜きを私に送ってくれました（右図）。これは Collecting Hokusai という、ボストン美術館の北斎展の紹介記事です。ここに例の写真が使用されていますが、いままでの写真と違って非常に鮮明であるのに気付きました。そこで記事を書いた Roger Warner 氏に、写真の原版がどこにあるかご存知か問い合わせました。すると、意外な返事が返ってきたのです。

その写真の原版は、アリゾナ州のローエル天文台にあるというのです。天文台を立てたのはパーシバル・ローエルという人で、ウイリアム・スタージス・ビゲローの親戚です。彼も 1881 年のボストンでのモースの講演を聞いて日本に興味を持ち、4 度も来日して日本各地を旅行しています。日本から帰国後は天文台を建て、火星の観測をして火星に運河があると言ったことで知られています。

彼は日本に関して「極東の魂（The soul of the Far East)」、「能登」、「神々への道（Occult Japan）」、などの本を著しています。「極東の魂」はラフカディオ・ハーンが感銘を受け日本に来るきっかけになりました。

ローエル天文台資料番号888番：「左よりモース(＊)、岡倉、フェノロサ(↓)、ビゲロー。日本のローエルの庭」の説明文

そこで私は、ローエル天文台のアーカイブにインターネットでアクセスしました。すると資料番号 888 番に問題の写真がありました（右図）。この写真のキャプションには「左よりモース、岡倉、フェノロサ、ビゲロー。日本のローエルの庭」となっています。これからの話の都合上、モースに米印、フェノロサに矢印をつけておきます。

さらに、資料番号 887 番には 4 人の並び順が異なる写真もありました。今度は左から岡倉、ビゲロー、モース、フェノロサの順で服装は先程と同じですがモースは帽子を被っています（右図）。

ローエル天文台資料番号887番（モース＊、フェノロサ↓）、

資料番号 886 番は棕櫚の木に寄り掛かったパーシバル・ローエルが一人で写っています。キャプションには「日本の家の庭で」と記されています（右図）。棕櫚の木は英語で palm tree ですが、アメリカでは「ヤシの木」を指します。棕櫚というのは日本と東南アジアにしか分布しないそうでローエルには珍しかったと思われます。

ローエル天文台資料番号886番
日本の家の庭で、パーシバル・ローエル

ローエル天文台資料番号885番：右から2番目にパーシバル・ローエル、3番目にビゲロー（フェノロサ↓、モース＊）

さらに 885 番では左から 4 番目にローエルが加わり、全員が帽子を被っております。左からフェノロサ、モース、ビゲロー、ローエル、岡倉の順です。いずれも棕櫚の木を囲んで撮影されています。背景に落葉した桜と刈り込まれたつつじも見られます（右図）。

同じ日に同じ場所で撮影されたと思われる一連の写真にローエルが写っていることから、撮影はローエルが来日中ということになります。ローエルは 4 回日本を訪れていますが、初来日は 1883 年 5 月です。モースはすでに 1883 年の 2 月に帰国しているので、モースが写真に納まっているはずはなく、別人ということになります。また撮影場所はローエルの庭となっていますが、初来日時のローエルは築地精養軒ホテルに滞在しており、庭付きの家ではありませんでした。

ローエルが 2 回目に来日したのは 1889 年 1 月で、この時、ローエルはイギリス法律学校（中央大学の前身）の校長、増島六一郎の家を借りています。場所は現在の六本木ヒルズ辺りと思われます。ローエルは母親に宛てた手紙に、「応接間の前の棕櫚の木は…目を楽しませてくれる。チェンバレンの紹介でイギリス法律学校の講師になり、居留地から脱出をした。」と書いています。つまり、今回の来日では旅行者ではなく、学校の英語教師になったので日米の条約に基づいてローエルは家を借りることができたのです。チェンバレンとは、東京大学の言語学教授バジル・ホール・チェンバレンのことです。ローエルはその後、2 回来日して家を借りていますが、ビゲローは 1889 年 12 月には帰国しているので、写真の撮影時期がそれ以降ということはありえません。

以上のことから、写真は 1889 年、ローエルが借りていた増島六一郎の家の庭で撮影された可能性が高くなりました。1889 年と言えば 2 月に東京美術学校も開校し、岡倉もひげを蓄えていました。そこで再び吉田先生に、1889 年つまり岡倉 26 歳のときの写真とすれば、この日本人は岡倉でいいかどうかお尋ねしました。吉田先生は、確かに岡倉の雰囲気があるが、まだ他の通訳である可能性も完全には否定できないと仰いました。

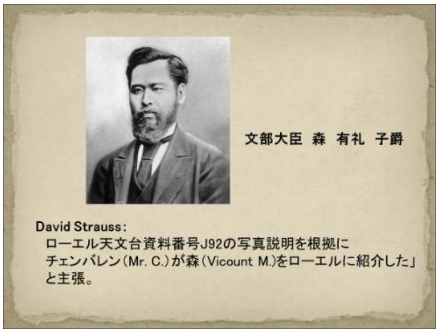
次にモースと思われてきた人物がモースでないとするといったい誰かということになりますが、私はローエルに増島六一郎の家を斡旋したチェンバレンではないかと考えました。チェンバレンはローエルが初来日するより 10 年前から日本に滞在しており、在京外国人のリーダーでした。彼は日本語の文法書や古事記の英訳を出版した人としても知られています。ローエルの日本滞在中の写真を探したところ、横浜開港資料館にその写真はありました（右図）。顔の輪郭、目鼻立ち、ひげの感じがよく似ています。来日後まもない 20 歳台の写真（来日直後なら 22 歳）と思われます。

実は、この西欧人がチェンバレンであることを裏付けるもう1枚の写真がローエル天文台に有りました。資料番号J92という右の写真ですが、日本人の服装が異なることから別の日の撮影と思われます。この写真のキャプションには「M子爵とC氏(Viscount M.and Mr. C.)」とありました。C氏つまりMr. C.とはチェンバレンのイニシャルと一致します。しかし日本人が岡倉であれば、イニシャルはMではありません。この写真説明は、ローエル研究者の間でも混乱を招いておりました。

例えばローエルの著書オカルト・ジャパンの日本語訳「神々への道」の口絵には887番の写真が掲載されており、左から3番目の人物はすでにチェンバレンンと特定しておりますが、日本人には、増島六一郎を当てております。

さらにローエルの妹の夫で、ローエルの死後天文台の運営を任されたWilliam Lowell Putnamは著書“Percival Lowell’s Big Red Car”の中で、885番の写真を引用し、日本人を宮岡恒次郎としております。チェンバレンの名はありません。宮岡恒次郎は英語に堪能で、ローエルの初来日時より彼の通訳を務めており、弁護士となって終生ローエルと親交を結びました。

最後に、ローエルの伝記を書いたDavid Straussですが、彼は論文の中でJ92の写真説明を根拠に、この日本人を当時の文部大臣、森有礼（ありのり）子爵と主張しました（右図）。チェンバレン(Mr. C.）が森をローエルに紹介したと述べています。確かにイニシャルMの3人の中で子爵であったのは森有礼だけです。



以上の経過から、顔の印象でものを言うには限界があり、写真鑑定の必要性を感じました。そこで無料の顔認証ソフトウエアを探したところ、マイクロソフトのTwinsOrNotというソフトがあることを知りました。このソフトは2枚の顔写真を取り込むと、2つの顔の類似度を計算してくれます。つまり、左に不詳日本人の写真を取り込み、右に岡島26歳時の写真を取り込むと、類似度は100%となりPerfect matchのコメントが付きました（右図）。

一方、イニシャルMの3人の写真を取り込んでみますと、増島六一郎の類似度36%、宮岡恒次郎25%、森有礼61%となり、本人といえるほどの類似度ではありませんでした。

次にモースと思われてきた人物にチェンバエレンの顔写真を当てはめてみますと、期待通り類似度100%でした。ビゲローの顔はどう見てもビゲローそのものの感じですが、やはり類似度100%でした。

フェノロサも念のためTwinsOrNotで検証してみますと、33歳の写真で類似度67%、35歳時の写真で72%と、似てはいなくもないが本人ではないとの結果だったので驚きました。（1889年フェノロサ36歳）（右図）

それでは誰かということになりますが、私はその人はローエルの周囲にいた人に違いないと思いました。そこで先にふれましたDevid Strausssが書いた「パーシバル・ローエル」の伝記を読みました。訳本ですが、このように書かれておりました。「ローエルはまたジョン・ヘンリー・ウイグモアやグスタビウス・ゴワードとも接触していたが、ゴワードは東京アメリカ公使館の秘書であり、ウイグモアは弁護士で日本の法律の専門家であった。」 そこで二人の顔写真を探したところ、ゴワードの写真は見つかりませんでしたが、ウイグモアの写真はすぐ見つかりました。

ウイグモアは、福澤諭吉が慶応大学の初代法律学教授としてボストンから招聘した人で、1889年10月23日に来日しております。そして3年間、教鞭をとり、退職時に学生と記念写真を撮っております。その顔の部分を拡大してTwinsOrNotに取り込みますと、類似度100%と出ました（右図）。TwinsOrNotでは類似度100%でしたが、ウイグモアをよく知る人物に顔写真を見てもらう必要性を感じました。

フェノロサとされてきた人物（左）とウイグモアの検証

そこで2016年に、ウイグモアの伝記を出版したオクラホマ大学アンドリュー・ポーワンチャー先生にメールで写真を送り、写真中の人物をウイグモアと思うかどうか問い合わせました。すると「この時期、ウイグモアは髪の毛を真ん中で分けていた。写真にはその特徴があるのでそうだと思う。ただ確認のためにハーバード大学卒業写真があるから、これで確かめるようにとの指示を頂きました。

類似度100%（ウイグモア来日2年前）
フェノロサとされてきた人物（左）とウイグモアの検証

果たして、この写真でも類似度100%でした（右図）。この結果をポーワンチャー先生に知らせると、ウイグモアですとのお墨付きを頂きました。

私は以上の結果を論文にまとめ、吉田先生の勧めで明治美術学会雑誌「近代画説」に投稿しました。すると論文は採用になりましたが、TwinsOrNotの精度はどれくらいかというコメントが付いてきました。「マイクロソフトは精度を公表していないので分からないが、別の顔認証ソフトでも検討します」と返事をしました。

本人達の許可を頂いて提示しますが、この二人は一卵性姉妹で、TwinsOrNotでは100%一致でした。ソフトの名称がTwinsOrNot、つまり「双子か否か」ですので、結果は誤りではないわけですが、TwinsOrNotの精度は一卵性双生児を「他人」とは識別しないレベルであったといえます（右図）。

一卵性姉妹

そこでそれに代わる顔認証ソフトをさがしたところ、マイクロソフトがビジネス向け有料顔認証サービスを開始していることが分かりました。それがマイクロソフト・アジュールの顔認証システムです。使い勝手はTwinsOrNotと同じで、二枚の顔写真を入力すると二つの顔が「同一人物」である可能性を検証し、検証後に「同一人物」であるか否かと、同一人物である確率をConfidence信頼度として返してきます。

そこでマイクロソフト・アジュールを用いて、先ほどの一卵性姉妹を検証してみますと、二人は信頼度0.49で「別人」と識別されました。

マイクロソフト・アジュールとは、マイクロソフトがクラウド（雲、ネットワーク）の中で提供している人工知能（AI）を使った高精度の認知サービス群のことです。現在、視覚／音声／言語／知識／検索といった5分野で認知サービスが利用可能です。顔認証は視覚AIを応用しており、２枚の顔写真を取り込めば、二人が別人か同一人物かを判定してくれます。

顔認証では先ず眉毛、目、鼻、口などの顔のランドマーク（27 か所）を検知します。次に顔のポーズや写真のサイズがまちまちなので、一定サイズの正面写真に修正します。これを顔の標準化（face normalization)と言います。さらにその人の顔の特徴を、機械学習技術を使ってモデル化した顔のビッグデータと比較して、2 つの顔が同じ特徴かどうかを判定（face recognition）します。

マイクロソフト・アジュールによる顔認証の判定基準は、信頼度 0.5 以上であれば同一人物と判定し、0.5 未満を別人と判定しています。

しかし同一人物でも年齢が離れすぎていると別人と判定することがあります。右図は私が小学 1 年時（7 歳）と大学卒業時（24 歳）の顔認証結果ですが、信頼度 0.36 で別人と判定されています。

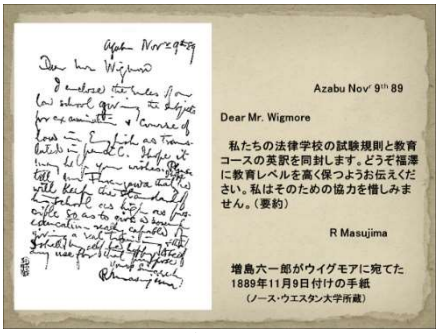
そこで TwinsOrNot で得られた結果をもう一度、マイクロソフト・アジュールで検証しなおしました。すると Azure でも、ボストン・オリエンタリスト」写真の日本人は、すべて岡倉天心と「同一人物」と判定されました（右図）。信頼度は 18 歳で 0.51、26 歳で 0.64 で、岡倉天心 26 歳頃の写真である可能性が高いという証明にもなりました。

M がイニシャルの 3 人はいずれも「別人」で信頼度はそれぞれ増島　0.18、宮岡　0.15、森　0.32 と低い数値でした。

モースと思われていた西欧人と 20 歳台のチェンバレンの写真では「同一人物」（信頼度 0.72）でした。ビゲローは 59 歳時の写真を用いても結果は「同一人物」（信頼度 0.60）で、年をとってもあまり変わらない顔でした。

一方、フェノロサはやはり「別人」と判定され、信頼度は 0.34 でした。フェノロサと思われていた西欧人とウイグモアは「同一人物」の判定で、信頼度は 0.56 でした。

以上の結果より、写真の人物は左から、チェンバレン、岡倉、ウイグモア、ビゲローと特定致しました（右図）。写真の撮影場所はローエルが借りていた増島六一郎の家の庭で、撮影時期は、ローエルとウイグモアがいることから 1889 年 11 月頃と思われます。では何故、来日直後のウイグモアがこの場所にいるのでしょうか？　その答えのカギを握る手紙が、ウイグモアが帰国後、学長を務めたノース・ウエスタン大学に保存されています。（チェンバレン 39 歳、岡倉 26 歳、ウイグモア 26 歳、ビゲロー39 歳）



これは英吉利法律学校長、増島六一郎がウイグモアに宛てた 1889 年 11 月 9 日付の手紙です（右図）。要約しますと、そこには「私たちの法律学校の試験規則と教育コースの英訳を同封します。どうぞ福澤に教育レベルを高く保つようお伝えください。私はそのための協力を惜しみません。」と書かれております。つまり教職の経験がないウイグモアは 10 月末に来日して、翌年 1 月から

の慶応の授業に備えなければなりませんでした。ウイグモアがローエルの家に行った目的の一つには、ローエルが借りていた家の家主、増島六一郎に挨拶するためだったのではないかと私は思います。

私はこれらの結果を、ローエル天文台とボストン美術館に知らせました。両方から「結果に驚いているが、面白い」のお返事を頂きました。2017 年、開催されたボストン美術館の至宝展のカタログでは、同じ写真が使われていますがキャプションは「岡倉（左から 2 番目）と来日中のお雇い外国人ら。右端はボストンの富豪ビゲロー、1889 年（明治 22 年）」と修正されていました（右図）。

高島嘉右衛門夫妻、教師ジョン・バラと生徒たち
（横浜市広報センター『市民グラフ ヨコハマ』No.31. 昭和54年）

４.第 3 部「横浜にあった高島学校の集合写真に写っていたのは岡倉天心少年か？」

最後に、顔認証に関連してもう 1 つ発見がありましたのでお話し致します。

2017 年 10 月、横浜で天心サミットがありました。そこでの講演で使用された高島学校の集合写真（右図）を見て、横浜岡倉天心市民研究会の事務局長千葉信行さんは、中央の少年は岡倉天心ではないかと閃いたそうです。そこで千葉さんは私に、顔認証による鑑定を依頼してきました。高島学校は高島嘉右衛門という実業家が横浜に建てた英語学校ですが、写真には高島夫妻とアメリカ人教師ジョン・バラが生徒たちに囲まれて写っております。多くは青年で、中には帯刀している者もいます。中央の少年は教師バラと高島夫妻に挟まれて特別の存在に見えます。髪を伸ばしており、洋装でネクタイをしめているようにも見えます。当時、横浜で幼い子を英語塾に通わせ、洋装させることができるほど財力のある家庭は限られています。

「本町五丁目 石川生糸店の図」
（五雲亭貞秀『横浜開港見聞誌』）

天心の父、岡倉覚右衛門は元福井藩士ですが、藩命（藩主、松平春嶽）により横浜で福井藩特産の生糸を販売する石川生糸店を営んでおりました。右図からも石川生糸店は西欧人たちが多く出入りする賑わいのある店だったことが分かります。岡倉家は経済的に恵まれていたと思われます。

岡倉天心は英語が堪能だったことはよく知られています。岡倉覚三の弟、由（よし）三郎は「改造」という雑誌記事で次のような兄の思い出を述べています。「僕より六つ歳うへであった次兄、覚蔵（のちの覚三）にいさんは、既に居留地の外人住宅の英語学校に通い始めてをられ、英学をバラ（J. H. Ballagh)と云ふ宣教師から学ぶと同時に・・・」。J. H. Ballagh とはジェームス・ハミルトン・バラのことで、英語学校はバラ塾とよばれていました。

また息子の岡倉一雄は著書「父　岡倉天心」の中で「伊勢山下に設けられた高島学校は出色のもので、教師としては、ジョン・バラが教鞭を執っていた。・・・天心もまた、同校に入学を許可され、ジョン・バラから英語の基礎教育を施された。」と述べています。

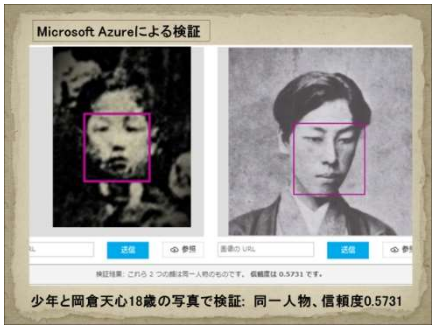
伊勢山下の高島学校全景
横浜市広報センター『市民グラフ ヨコハマ』No.31、1979年

ここでバラ塾と高島学校の関係を説明しますと、ジェームス・バラは 1871 年（明治 4 年）5 月、横浜の居留地の自宅に隣接して会堂（現、横浜海岸教会）を建て、日曜集会に来る青年達に英語と聖書を教える英学塾を開きました。これがバラ塾です。この時、岡倉は満八歳です。同じ年の 12 月に高島学校が開校すると、ジェームス・バラも教員に加わっております。しかしジェームスは 1872 年 6 月に、弟のジョン・バラをアメリカから呼び寄せ、高島学校の教師を交代しています。この時、岡倉は 9 歳です。

前出の集合写真の撮影時期は不明ですが、翌年、岡倉一家は東京に引っ越していますので、写真の少年は岡倉とすれば 9 歳ないし 10 歳ということになります。

右図は高島学校の全景です。近くに当時の横浜駅が見えます。生徒数は約 200 人前後といわれていますので結構大きかったようです。高島学校は明治 6 年に横浜市学校となり、その翌年に焼失してしまいました。

そこで問題の少年と現存する天心の最も若い 18 歳時の写真をマイクロソフト・アジュールで顔認証してみると、結果は信頼度 0.57 で「同一人物」と判定されました（右図）。少年の顔をよくみますと、髪を分ける方向、額の広がり、眉の吊り上り方、腫れぼったい瞼と切れ長の目尻、鼻の形などに 18 歳時の岡倉の特徴がすでに表れているように思います。



現在、石川生糸店があった場所は横浜市開港記念会館になっております。正面入り口の左側に、岡倉のブロンズ像をはめこんだ「岡倉天心生誕の地」という記念碑があります。

3 年前（2017 年）、ビゲローの別荘があったタッカーナック島とはどんなところか見たくて、隣のナンタケット島の一番西の海岸まで行きました。この沖合の島がタッカーナック島です。上陸はできませんでしたが、遠くからこの島を眺めて大変満足して帰ってまいりました。最後に、右の写真をご紹介して、講演をおわりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

【質疑応答】

Q：岡倉天心のいった「アジアは一つ」という言葉の意味についてご教示ください。

A：この有名な言葉は、軍拡を進める軍部がアジアへの侵略の口実として、意図的に利用したというのが現在の一般的な見方です。岡倉は日本の文化を調べていくうちに、それが中国や韓国、インドから来ていると知りました。彼は日本文化の源流を探るためにインドまで行っているのです。日本文化が決して独立した独自の文化ではなく、アジアという文化圏の一つであるということを、「アジアは一つ」という言葉で表したかったのだと思います。それが、軍部によって間違った方向に利用されたというのが、今の一般的な見方であると私は理解しています。

Q：海外で保管されてきた日本の美術品、特に浮世絵などの状態が、日本でのそれと比べて良いのはなぜでしょうか。

A：これは保存状態の差だと思います。保存状態を良く保つためには空調や湿度管理などがあると思いますが、湿度の高い日本の天候が保存に適していないのではないかという気がします。日本の美術品が海外に流れたことについては残念な一面もありますが、日本で注目されなかった美術品が良い状態で保存され、そして、日本文化を伝える美術品を、世界の多くの方が鑑賞できるのは、良かったことなのではないかと思います。

伊藤泰雄（いとう　やすお）先生のプロフィール

・1968 年、慶應義塾大学医学部卒。医学博士。
・1974～1976 年、ビゲローが外科医として在籍したハーバード大学 Massachusetts General Hospital（MGH）の小児外科研究員。
・1980 年より杏林大学医学部外科に勤務し小児外科を担当、1994 年小児外科学教室初代教授。2009 年定年退職。
・現在、杏林大学名誉教授、新百合ヶ丘総合病院小児科で小児外科を担当。

・2006 年のボストン美術館所蔵肉筆浮世絵展でビゲローを知り、ビゲローに関する資料の渉猟を開始。
・論文に「ボストン・ブラーミン　ビゲロー家の 3 博士」（日本病院会雑誌 2016 年）、「所謂ボストン・オリエンタリスト写真の人物特定―岡倉覚三が交流した在京欧米人」（明治美術学会「近代画説」2017 年）、「顔認証を用いた『ボストン・オリエンタリスト』写真の人物特定」（LOTUS 日本フェノロサ学会機関誌 2018 年）、「顔認証で特定した少年岡倉天心―高島学校の集合写真より―」（LOTUS 2019 年）がある。

主な著書
『最新看護学入門』5 巻第 21 版（分担、メジカルフレンド社）1988 年
『臨床外科看護各論』第 5～7 版（分担、医学出版）2000～2008 年
『標準小児外科学』第 1～5 版（分担、医学出版）1985～2007 年
『標準小児外科学』第 6 版（監修、医学出版）2012 年
『エビデンスに基づいた小児腸重積症の診療ガイドライン』（ガイドライン作成委員会委員長、へるす出版）2012 年
『Intussusception and bowel obstruction- Symptoms, diagnosis and treatment options』（分担、Nova Science Publishers, New York）2015 年